鹿児島国際大学
社会福祉学会誌

ゆうかり　第16号

崎原秀樹先生追悼号

鹿児島国際大学社会福祉学会編集

2017（平成29）年３月17日発行

目　　次

巻頭言「機関誌機関誌『ＹＡＭ』の思い出」　社会福祉学会会長　小窪 輝吉 ……1

崎原秀樹先生への追悼

教員　「追悼の辞」　大学院福祉社会学研究科特任教授　田畑 洋一 ……2

「追悼文」　平成27年度社会福祉学会運営委員長　鱒渕 祐一 ……3

学生（元ゼミ生・卒業生）……4

有里 樹里亜・峯嵜 由紀・川崎 愛子・野中 慎之介・井手上 鈴果

川ノ上 雄・濵田 慎介・前田 結華・田畑 翔次・下村 真子・牧角 壮一郎

新任の先生・松元泰英先生をお迎えして「特別支援教育との出会いとその魅力」

教授 松元 泰英 ……9

演習論文報告会コメント（増田 和高・村上 光朗・松元 泰英）……11

2016年度社会福祉学会・自主研究助成による研究報告 ……14

☆　熊本地震 被災地ボランティア―子どもたちへのボランティア―（3年 濵田 凌）

☆　A地区 介護サービスおよび日常生活の課題についての研究～アンケート調査を用いて～

（鹿児島国際大学大学院福祉社会学部研究科博士前期課程 2年 坂上 竜三）

2016年度鹿児島国際大学社会福祉学会シンポジウム（松元 泰英）……20

地方で知的障害者と「楽しく」生きる～鹿児島国際大学SO同好会の活動と課題～

2016年度演習論文テーマ ……22

社会福祉学会自主研究助成の募集 ……29

鹿児島国際大学社会福祉学会会則 ……30

2015年度鹿児島国際大学社会福祉学会・決算報告 ……32

編集後記 ……33

巻頭言

―機関誌『ＹＡＭ』の思い出―

社会福祉学会会長　小　窪　輝　吉

本号は崎原秀樹先生の追悼号になりました。崎原先生は長年、学会誌「ゆうかり」の編集に献身的に関わってきた方です。本年度、社会福祉学会では４月に新入生歓迎行事を行い、５月の総会で事業計画を承認し、７月にシンポジウムを開催しました。崎原先生はシンポジウムの企画・コーディネーターを担当し、学長をはじめ卒業生の参加を得るために中心的役割を果たしました。シンポジウムは盛況のうちに終了しました。

崎原先生は８月３日（水）の学科会議に遅れて来たとき「夏風邪」を引いたと言っていました。学科のポリシーについて少し意見交換をしたのが私と崎原先生との最後の会話になりました。その後入院したことも知らずにいましたが、８月15日（月）の早朝、逝去されたという連絡を受けました。その日、学科の教員と総務課の職員の協力のもと崎原先生とお別れの時間を取り持つことができました。翌日の午前10時には、夏休みにもかかわらず多くの学生及び教職員が５号館前に集まり、崎原先生を見送ることができました。

生前、崎原先生の元気な声が５号館全体に響いていましたが、それが突然に消えてしまいました。年末には研究室の整理が行われネームプレートが取り外されました。コピー室のレターボックスには崎原秀樹の名前が残っています。これもしばらくしたらなくなるでしょう。しかし、社会福祉学会室には崎原先生が発行に関わった「ゆうかり」のバックナンバーが残っています。崎原先生の教えを受けた学生の心のなかにもしっかりと先生の姿が残っています。私たち同僚にも大きな笑顔と元気な声が残っています。その証として本号に崎原先生の思い出を残したいと思います。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

崎原先生亡き後、「ゆうかり」の編集を佐々木陽子先生がお引き受けくださいました。佐々木先生は現代社会学科の学会誌の編集をされていたということで急遽担当をお願いした次第です。佐々木先生は本年度限りで退職されます。お忙しいところ編集をご快諾いただき感謝申し上げます。

昔の学会誌の記憶をたどってみました。1982年に社会福祉学科と産業社会学科からなる社会学部が誕生し、そこに学生と教員で構成する学部学会「社会学会」が発足しました。「社会学会」では学会活動の広報誌的役割を果たすための会報誌として「ゆうかり」を、機関誌として「ＹＡＭ」を創刊しました。「ゆうかり」は、第１号が1983年10月に発刊され、手元に残る第23号が1997年３月に発刊されています。内容は学会活動、助成研究報告、講演会報告、新任教員の紹介、随筆など多様です。当初は10ページ前後の２つ折りになったニュースレターのような体裁で、白黒印刷でした。2001年に福祉社会学部に改組した際、学部学会から学科単位の学会に変わり、社会福祉学会では「ゆうかり」の名前を継承し第１号を発刊しました。今回で第16号になります。

ところで、途絶えた機関誌「ＹＡＭ」の話です。第１号創刊が1985年９月で、手元に残る第11号が1997年３月に発刊されています。年１回の発行で、当初は学生の独自企画が多くを占め、数十ページの中身の濃い冊子形式でカラー刷りでした。私の記憶では「ＹＡＭ」は学生が中心になって作っていたと思います。学生の常と言っては失礼ですが、発行が遅れ遅れになるということで、当時無役の私に発行の進行担当が舞い込んできました。第１号が出た半年後の1986年３月までに第２号を発刊するということでした。当時の学生の紙面つくりは、トレース用紙１枚１枚に完成ページに近い形で枠取りと文字を手書きで書くやり方でした。ワープロも普及していない時代でしたので、最後の文字がきちんと埋まるように何回も新たに書き直していました。印刷会社の方から、「原稿と文字サイズとレイアウトの指示をいただければこちらで作るのでそちらの方が早いんですけど…」と言われながらも、学生は「自分の手で紙面を作るんだ」とこだわりを見せていました。ＹＡＭはYoung Association Magazineの頭文字を取って付けた名前で、サツマイモを指すこともあるyamの意味を含むということでした。ある学生は表紙に載せるサツマイモの絵を描く担当で、それだけの作業に没頭していました。あの号限りのことでしたが、年末から３月初旬まで学生が私の研究室に缶詰めになってＹＡＭの紙面作りをしたのが懐かしい思い出です。学生の学会への取り組みが半端なかった頃の話です。

崎原秀樹先生への追悼

追悼の辞

2016年８月、崎原先生が54歳の若さで急逝されました。入院７日目の出来事でした。同僚の私どもは亡くなられたということが信じられず、ご本人も夢か現か、信じがたい出来事であったに違いありません。入院の前日には会議に出席され、普段と変わった様子ではなかったようですが、会議の後に病院に行かれ、その日に即入院されたそうです。一時は元気になられたそうですが、悲しいことになりました。元気いっぱいの声の大きな先生で、学生への声かけは欠かせませんでした。とくに学内学会「鹿児島国際大学社会福祉学会」では、先生が学生に「元気かい」「原稿を書いてみないか」などと声をかけられ、学生の学会参加を呼びかけ、学会の活性化にご尽力されました。崎原先生は毎年行われる新入生歓迎会、総会、講演会、研究助成成果報告会、卒業パーティ、そして機関誌『ゆうかり』の発行などに精力的に関わってこられました。とくに2015年学会発行の『人生楽しく するもしないも 自分次第』(ラグナ―出版)は、先生の企画編集によるものです。同書には、学会の成長の記録や学生の生の声が綴られており、示唆に富む内容になっています。編集者としての先生から学生への熱いメッセージも収められています。学生の皆さんは今一度、手にとっていただきたいと思います。

崎原先生は神奈川県の出身で、東京学芸大学大学院教育学研究科障害児教育学専攻を修了(教育学修士)され、ことばの発達障害など、言語臨床という場において、ことばへの指導と心のケアに研究の中心を置かれ、さまざまな実践活動を続けてこられました。大学院修了後、非常勤ではありましたが、東京都中野区立障害者福祉会館や練馬区立心身障害者福祉センターなどに約10年間勤められていました。その後、2002年４月、鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科に赴任されました。本学での担当科目は、発達心理学、知的障害児の言語指導Ⅰ・Ⅱ、発達障害児教育総論、特別支援教育実習などで、それまでの実践活動が授業に活かされ、学生からの授業評価も良好でした。授業の他、本学福祉社会学部の児童相談センターの中心メンバーとして活躍されて、同センター『年報』には多くの論考を発表されています。著書も多数で、共著ですが、臨床経験を踏まえた『言語臨床の「人間交差点」言語臨床事例集第８巻』(学苑社)、『吃音事情第４号』(NPO法人全国現有会連絡協議会)、『キーワードで学ぶ障害児保育入門』(保育出版社)、『発達のための臨床心理学』(保育出版社)、『保健医療サービスとソーシャルワーク』(法律文化社)などがあります。また、日本特殊教育学会、日本発達心理学会、日本コミュニケーション障害学会、日本教育心理学会、日本社会臨床学会、日本保育学会、日本社会福祉学会、日本福祉文化学会などに所属され、積極的な学会活動をされていました。特に日本社会福祉学会では、毎年のように演習を題材にしたポスターセッションを実施されていました。崎原先生はそうした活動をしながら、言語聴覚士や保育士などの国家資格を取得され、地域の学校や施設でも有意な活動を続けておられました。

崎原先生が亡くなられたことは、大学にとっても学部にとっても大きな損失であり、残念でなりません。私どもは先生の学生思いの雄弁さとポジティブの生き方に接することができなくなりました。また、大きな声で語り合っている姿もみれなくなりました。最後になりましたが、学内学会「社会福祉学会」を盛り立て、中心になって活躍されてこられた先生に心から感謝し、今後も先生の意を汲み学内学会を活性化していくことを誓います。崎原先生の存在が福祉社会学部にとって、学内学会の運営にとって、いかに大きなものであったか想いおこし、ここに謹んで哀悼の意を表します。合掌

大学院福祉社会学研究科特任教授　田畑 洋一

崎原秀樹先生への追悼

追悼文

平成28年８月15日朝、崎原秀樹先生の訃報に接し、信じられない思いでただ呆然としてしまいました。54歳というあまりにも早すぎる死は、我々社会福祉学科の教員のみならず学園にとってもかけがえのない存在の喪失であり、痛恨の極みと言わなければなりませんが、誰よりもご本人が無念であったろうと思います。

先生は、社会福祉学会の委員として、率先して、学会機関紙『ゆうかり』の編集に長く尽力され続け、その集大成でもある『人生楽しくするもしないも自分次第』（2015年８月発行）についても、企画段階から完成に至るまで最大の貢献をしていただきました。2015年３月に、先生の発案で同書の企画が始まり、その卓越した編集の手腕と、在学生だけではなく卒業生との深く強いネットワークを駆使し、出版にこぎつけることができました。こうした人と人との絆は、一朝一夕で手に入れられるものではなく、先生がたゆまず実行されてきた地道な努力と、人を引きつけてやまないそのお人柄ゆえのことは万人の認めることでありましょう。同書は、『ゆうかり』創刊号（2001年発行）から第14号（2015年発行）の誌上に掲載された作品の中から、「１．読んで面白く、他の人に勧めたい作品、２．学生やOB、OGたちが地域やそこにあるネットワークにつながり、何で遊び、あるいは学び、自分の生きるかたちをつかんできたかが見えてくる作品」（同書あとがき「人生をつかずはなれず楽しむために」より）を厳選して出来上がった力業です。学生のみなさん、卒業生のみなさん、ぜひご一読をお勧めします。学び舎から、そして様々な仕事の現場から発せられた苦難と喜びの肉声に耳を傾けてください。

私のようなbookishな人間には想像を超える、先生の驚嘆すべき才能の一端は、毎年開催される社会福祉学会主催の「シンポジウム」の在り方にも象徴的に現れていました。先生は「先行きの見えにくい時代、どのような一歩を踏みだすか」（同上）という問題意識を常に念頭に置かれ、長年に渡ってこつこつと築き上げられた先生独自の人脈の価値を最大限に発揮され、今ここにある問題に焦点を当て、様々なイッシューを焙り出しながら、参加者に問題意識の共有と「気づき」を与えていただき、さらなる議論の深化を促すような仕掛けを施されていたように察します。そうした、人と人との化学反応、相互作用を通じて、「次の一歩を見つけようじゃないか」と先生は仰っているように感じます。

あの快活で抑揚豊かな先生の声を聞くことはもはや叶わぬこととなってしまいましたが、先生が残された足跡に目を凝らし、耳を傾け、社会福祉学科と社会福祉学会の明日への一歩を見つけなければなりません。

ご冥福をお祈りします。May his soul rest in peace.

平成27年度社会福祉学会運営委員長　鱒渕祐一

崎原秀樹先生への追悼

崎原先生への追悼文

2016年度 崎原 元ゼミ生・卒業生

３年次に履修したソーシャルワーク演習で担当していただいたことが崎原先生との出会いでした。最初は、失礼ながら、崎原先生の風貌に本当にこの方が大学の先生なのだろうか…と、怪しく思いながら講義を受けたことを覚えています。

４年次に上がり、途中から崎原ゼミへ移動させていただきました。「移動したい」とお話しした時も、いつでも気軽においでと言ってくださいました。崎原ゼミは、いつも明るく、笑いの絶えない、とても居心地の良い空間でした。崎原ゼミに移動してからは、ゆうかりのエッセイを書く機会や、学内社会福祉学会シンポジウムのシンポジストをさせていただくなど、様々な経験をさせていただきました。文章を書く、人前で発表することが苦手な私に一から親身になってご指導してくださりました。時には夜遅くまで時間を割いてくださったこともありました。本当に生徒思いで、私の納得のいくまでずっとつきあってくださいました。

入院される前日に、妊娠したことを相談した時も、ずっと言えずに悩んでいたことに気づいてくださっていて、「おめでとう、まずは出産頑張って学校も頑張ろうな」と言ってくださいました。

崎原先生の突然の訃報は未だに信じられない思いです。親身なご指導と、たくさんの思い出をありがとうございました。崎原先生のご冥福を、心からお祈り申し上げます。

有里　樹里亜

「わはははは！」廊下に大きな笑い声が響く。その笑い声の先にはいつも崎原先生がいた。常に笑顔の絶えない先生だった。崎原先生に出会った当初の私は何事にも緊張しやすい性格で、初めて先生と会話した時のことも緊張しすぎて話の内容はあまり覚えていない。しかし、あの迫力満点の笑顔でその緊張はどこかへ吹き飛ばされていった。どこか不思議なパワーを持っている先生だった。

あまりにも突然の訃報で、連絡を受けた時は何かの間違いではないかと思った。嘘だと思いたかった。しかし、夏休みが終わって学校が始まり、ゼミに行ってもそこに崎原先生の姿はなかった。そこでやっと死を実感し、今までの感謝の気持ちが胸いっぱいに溢れかえった。今でもどこかをふらふら旅をしていて、人懐っこいあの笑顔でひょっこり帰ってくるのではないかと思っている自分もいる。

崎原先生たくさんの笑顔をありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

峯寄　由紀

私と先生の出会いは、私が休学中に教務課（学生課？）から入りたいゼミの指導教諭に直接自分でアポイントを取ってください、と言われたことに始まる。ゼミと言われても事前にまったく資料を

持っていなかった私は、前年度の演習論文発表会で崎原ゼミの先輩方の発表を聞いていたことを思い出し、その内容からこのゼミではなんでもできるのではないか、と思い崎原先生に連絡を取ったのである。つまり、たまたまだった、私が崎原先生のゼミの門を叩いたのは。

初めてメールを差し上げた翌日、すぐに先生から返信があった。時間があるときに、研究室まで来て欲しいと。その時に詳しく話を聞きたい、ということだったので、その日の午後、私は崎原先生と初めて対面することになったのだ。

崎原先生を思い出すとき、先生の研究室はセットで思い出される。その研究室で初対面にも関わらず、２時間近く、いろいろな話をした。私が演習論文のテーマにしたいと漠然と思っていた「障害」とは何かという疑問について。はては学問というのは結局哲学にいきつく、という結論。そのとき先生がご紹介くださった２冊の本は、今も私の本棚にある。

それから本格的に私は大学に復帰したのだが、そこからの日々はめまぐるしかった。演習論文の前段階となり得るものを書いてみないか、という先生の提案。最初はただ書くだけだと思っていたら、いつの間にか社会福祉学会の自主研究助成の対象にしないか、という誘い。私は他大学を卒業した経験があるので、書くことにば慣れていたが、そのときも指導教授とは別に勝手に書いたものをゼミ論としても卒論としても提出していたので、他人、というか指導教諭と一つの論文を書き上げる、という作業は初めてのことで、戸惑いも大きかった。

こちらが意図していなかったことも、もしくは無意識に思っていたことも、文面から汲み取ってくる。ここはもう少し突っ込んで書いた方がいい、この部分はここに書くよりももっと前段階で論じた方がいい。先生からの要望を応えることに、私は精一杯だった。次々と要望は降ってきて、だからこそ、私は論文を書き上げることができたのだと思う。

先生の訃報をうけとったとき、最初に浮かんだのはやっぱり論文のことだった。次に、構内を歩く先生の姿。姿が見えなくても先生だとわかる大きな声。そして、研究室。

その後の研究室がどうなったのか、私は知らない。いまでもあの研究室ままではないだろう。すでに片付けられているとは思う。それでも、私のなかであの研究室は「あの」研究室のままなのである。先生にご指導いただいた時間、そのときのままだ。

崎原先生、ありがとうございました。

ご冥福をお祈りいたします。

川崎　愛子

僕が、崎原先生に出会ったのは、２年生の前期に受けた障害児臨床心理学の講義をうけたのがきっかけでした。その講義のなかで、崎原先生が出版された「まよなかのシャボンだま」を、初めて読んだ時正直、何のことを言っているのかわからなかったのを覚えています。でも、それは読者自身に考えさせる為に、全部ひらがなで書いていると知った時は、すごい人だなとおもった。３年になり崎原ゼミに入って話をしていると、今まで自分の話をするのが苦手だった僕が、今現在、話を出来るようになっていたのは、崎原先生との会話の中で少しずつ自信がついたからだと思います。大学に入って崎原先生と関わっている人に出会えて話を出来て良かったと思います。

卒業してから普通に呑みに行ったり学校に顔出して話をしてるんだろうなと想像していた為、話を聞いた時は、本当に驚きました。崎原先生曰く、僕は「気弱なジャイアン」らしいので「気弱なジャイアン」らしく先生に認められるような社会人になりたいと思います（笑）

今まで、本当にお疲れ様でした。マタアイマショウ。

野中　慎之介

まず、この追悼論文では崎原先生の事を崎原教授と呼ぶのが正しい呼び方であると思いますが、崎原教授は教授と呼ばれる事を嫌がる方でしたので崎原先生と書かせて頂きます。

短い付き合いではあったが、崎原先生とは深く関わりを持つことが出来た。深く関わり、崎原先生ば情が厚く生徒一人一人真剣に向き合って下さる先生であった。私との付き合いは４年次でゼミの変更があった為、他の生徒と比べたら短い付き合いであったが、卒業論文やその他もろもろ私に真剣に向き合って下さってくれているということがとても伝わった。きっと崎原先生とは一生の付き合いになるであろうと思っていた矢先、お亡くなりになられた為、私にとってのショックはとても大きかった。先生の死を受け入れるまで時間はかかったが、死を受け入れてからは崎原先生への有難みを実感している。

崎原先生への感謝とご冥福をお祈り致します。

井手上　鈴果

僕が崎原先生と親しく話す様になった時期は、３年生になる前の春休みに、崎原先生に頼まれて、研究室での作業を手伝ってからだった。

その時期、自分は大学も面白くなく辞めたいとまで考えていた。自分を上手く外に出す事が出来なかったと思う。自分は崎原先生と会話していく中で、過去の出来事のリフレーミングや内省、現在している事の組立てを行う事が出来た。春休みに何度も先生の作業を手伝う中で、自分を見つめなおす事が出来た。

３年生になってからは、精神福祉コースに進む事も出来て、崎原先生のゼミに所属した。そこからは、楽しいとまではいかないが、そこそこいい雰囲気で大学生活を過ごせたと思う。

崎原先生には、自分を開示していく勇気や、自分を知る事になる自己覚知の基本を教えて頂いた気がする。これからも、自分を見つめなおしたり、崎原先生に教えてもらった事を思い出しながら夢に向かって進んで行きたいと思う。

濱田　慎介

崎原先生のご逝去に対し心よりお悔やみ申し上げます。

私が崎原先生と初めて話したのは、ゼミを考え始めた２年生の夏休みでした。サークルの用事で学校に来た時に先生を見かけて話しかけ、少し話しただけなのに先生は「おまえ面白いな」と笑っていました。それからは学内で会うたびに崎原先生に声をかけてもらい、話していくうちに自分はこの先

生のゼミに入ろうと決めました。

先生について書きたいことがたくさんあります。演習の授業のこととか、「これ書いてみろ」つて言われて先生と一緒に書いた児童相談センター年報の紹介文についてとか、ゼミの皆と行った阿久根大島のこととか。

先生に話したいこともたくさんあります。SW実習のことや就職についても話したいし、サークルの愚痴はたくさんあります。私が何かで悩んでいた時も、私のそんな姿を見てあなたはきっとそちらの世界でもガハハハと笑っていたことでしょう。そんな崎原先生のゼミを２年間受けたかったし、私が卒業してからも一緒に飲みに行く予定でした。先生に会ってから得た知識や経験は多いし、人生観も少しだけ変わりました。先生に出会えて本当によかったと心から思います。

崎原先生、ご指導いただき本当にありがとうございました。60年後ぐらいにまたお会いできるのを楽しみにしています。

下村　真子

「おい、ナンパーマン（笑）」

「いやいや、先生ほどじゃないっすよ」

これが私と崎原先生のいつもの挨拶だった。

私は休学をしていたので崎原先生とは約６年程の付き合いだったが、国際大学で会った誰よりもインパクトが強かったのは確かだ。

初めて絡んだのは１年生の時、学生ホールでだ。友人にやたらデカい声で話し掛けているヤバそうな奴がいて、興味本位で私から絡んだ。それからは私を見掛けるとニヤニヤしながら近付いてきては「またお前かよ（笑）」と声を掛けてくれた。

どちらかと言えば私が愚痴を聞かされる事が多く、某ファミリーレストランで６時間以上話を聞かされたこともあったが、今ではいい思い出だ。

崎原先生は私が知る中で一番教員らしくない教員だ。決して悪口ではない。誰よりも生徒側の意見を理解し一緒に考えてくれる物好きな先生だった。勿論褒めているつもりだ。

煙たく思った時期もあったが、いなくなるとやはり寂しいもので、色々と支えられていた事に今更ながら気付かされる。崎原先生の様にはなれないが、最後の崎原ゼミ生として一言贈らせて貰います。

『今まで本当にありがとうございました。ゆっくりとお休み下さい。』

川ノ上　雄

崎原先生との出会いは２年の春、大学構内を移動中に先生から声をかけられたことが始まりでした。

その後、崎原先生のゼミに所属したことにより、私の大学生活はより充実したものになっていったと思います。

それまで外出に消極的であった私もゼミの食事会をきっかけに少しずつ出かけるようになり、先生

が公共交通機関を利用した外出の機会を作ってくださったことで行動範囲も広がっていきました。

また、困った時や、悩んだ時には、相談に乗ってくださり、いつも私の背中を押してくださいました。先生には様々な面でサポートをしていただき、本当に感謝しています。ありがとうございました。

心よりご冥福をお祈りします。

前田　結華

３年のとき崎原ゼミに決まってから初のゼミの際、５号館の２階に響きわたる崎原先生の、どでかい笑い声に引いてしまったことが懐かしいです。

声量の調整ができない先生でしたが、学生とちゃんと正面から向き合って話してくれる先生でした。何でもないような話をひろってくれて、盛り上げてくれました。崎原先生にはたくさんいじられました。それはコミュニケーションを取ろうとしてくれた、先生の優しさだったように思います。

４年になって卒論を書き始めないといけない時期になったとき、何も考えていなかった自分に何度も話を振って考えさせようとしてくれたこと、とても感謝しています。

就職のことについてたくさん相談したいことがありましたがもうできません。これからは崎原先生に教えていただいたことを忘れず頑張っていきたいと思います。

田畑　翔次

平成19年度卒業生を代表して

教え子を代表して、崎原先生の御霊前に、謹んでお別れの御挨拶を申し上げます。

崎原先生がこのような形になろうとは思いもよらないことでした。私が直接先生の御指導を受けたのは障害児心理の講義でした。いつもオーバーリアクションで学生の笑いをさそうダイナミックな内容は学生間でも大好評でした。

また、私が国際大学の聴講生として通い、４回目の国試挑戦をする際、「合格したら、合格体験記を書いてくれ」と依頼を受け、無事合格し、合格体験記を書かせていただきました。

私の一番の思い出です。そしてなにより学生に一番近い先生でした。就職が決まらず、思い悩んでいた時も、先生は特有の「笑い」で私の悩みをかっとばしてくれました。

崎原先生、たくさんの思い出をありがとうございました。天国でゆっくり休んでください。

お疲れ様でした！

牧角　壮一郎

新任の先生の自己紹介　松元泰英先生をお迎えして

特別支援教育との出会いとその魅力

鹿児島国際大学 教授　松 元 泰 英

はじめに

今年度４月から、特別支援担当の教員として、鹿児島国際大学に赴任しました松元です。人生というものはわからないもので、大学在籍中の自分のことを考えると、今、特別支援教育担当の教員として、大学に私が勤務することになろうとは、周りの誰もが予想しなかったことだと思います。誰よりも私自身が、最もビックリしています。というのは、私は、大学は理系で理学部の生物学科に在籍していました。そこで、電子顕微鏡を操作しながら、粘菌(社会福祉学部に関係ある年金ではなく)を観察していたのです。それがどうして、こうなったのかをお話します。

私は大学院の修士課程まで進み粘菌の研究をしていたのですが、すごく勉強したわけでもなく、なんとなくダラダラと研究をやっていたので、大学院修了後、研究機関に就職することもできず、だからといって、粘菌の研究に関係しているような企業はなく、最終学年のかなり遅くまで就職が内定しない状況が続いていました。当時は、粘菌の研究をまだやりたい気持ちもあったのですが、まずは、就職をしなければという思いで、就職活動を頑張ったところ、運良く、ある食品会社の開発部に採用されました。昔から店で商品をリサーチすることが趣味だった私にとって、新商品を開発することはとても興味深く、希望に満ちて入社しました。しかし、一般企業はそんなに甘くなく、１年で会社を辞めることになりました。ここで、なぜ離職することになったのかについてお話します。前にも述べましたように、商品リサーチが趣味である私は商品開発の仕事は好きで、デパート地下の食品売り場やスーパーなどの陳列棚を見ながら、こういう商品は思わず手に取ってしまうなとか、どういう商品を主婦が求めているのかを研究をしていました。しかし、この年開発部で開発した２種類の新商品のいずれもが全く売れずに、返品の山を築くことになったのです。皆さんご存知ないと思いますが、食品業界では毎年多くの商品が開発されています。しかし、その商品のほとんどが、日の目を見ることなく、いつの間にか市場から消えていってしまうのです。その中でも、この２つの商品は何億という投資を行ったのに、借金だけを会社に残してしまう結果をもたらしました。この状況は、従業員1,000名規模の会社の場合には、直接社員のボーナスに響いてきます。そのため、開発部員の居場所が、会社の中でなくなり、毎日いたたまれない状況で、出勤する羽目になったことを今でも覚えています。また、私の場合、直属の上司との人間関係もうまくいっていなかったこともあり、転職のことを次第に考えるようになりました。転職してどうするか、ほかの会社に就職するのか、公務員(教員)になるのか迷いましたが、企業であれば、ほかの会社でも同様なことになる可能性が高いと考え、取得していた教職免許で、教員を目指すことにしました。その当時は、教員採用の年齢は29歳までだったので、私立高校の舎監をしながら、必死で勉強し、翌年鹿児島県の公立中学校の理科教員として無事スタートをきることができました。

中学校の教員として

あまり目標も持たずに中学校の教員になった私ですが、中学校の教員は、私が考えていたより忙しく大変で、その代わりに楽しい職業ではありました。しかし、年数を重ねるにつれ、次第に毎年同じ内容を教科書に基づいて生徒に教えることや教える内容がどの生徒にも同じでいいのかなどの疑問を持ち始めるようになり、このまま中学校で理科を教えることについての疑問を抱き始めました。

特殊教育（今の特別支援教育）との出会い

このような疑問が湧き上がった頃に、ちょうど出会ったのが特殊教育でした。２校目の中学校は、大きな学校ではなかったので、理科だけでなく他の教科も受け持たなければいけなかったのですが、これが幸いしました。１年目は理科と数学を教え、２年目以降も数学を教えていくのか悩んでいた時に、特殊学級の担任の先生と話をする機会ができました。当時、特殊教育について全く知識がなかった私は、その学級がどのような教育を行っているのか、またどのような子が在籍しているのかもあまりよく理解していませんでした。担任の先生と話をするうちに、その学級には、知的障害の子どもが３名在籍し、その子どもたちの実態に応じて適切な教育をすることが大切であることなどを知ることができました。何よりもビックリしたことは、教科書を使わなくてもよく、その子どもの必要性に応じて教えることができる点です。今考えると当然のことですが、それまで通常の学級でしか授業をしたことのなかった私にはかなり衝撃でした。偶然、その先生は、次の年には転出されることが分かっていたので、次年度ぜひその学級を受け持ってみたいと思い、特殊学級の担任を希望し、晴れて特殊教育に足を踏み入れることができました。特殊学級の担任になってみると、毎日新しいことを体験することができ、驚きの連続でした。今まで特殊教育について全く習ったことがなかったので、その当時、私は自閉症やダウン症の子どもについての知識も全くありませんでした。自閉症ついては、文字通りに緘黙症と同じような症状なのかなと考えていたぐらいです。32歳で初めて特殊教育に足を踏み入れたのですが、すぐにその魅力の虜になりました。特殊教育をやればやるほど面白くなり、どうしても次の転勤では特別支援学校へ行きたいと思うようになりました。しかし、如何せん私は特殊教育の免許を持っていなかったので、このままでは、特別支援学校へは行けません。そこで、免許取得のために、大学の夏季集中講義に４年間通い、二種免許を取得し、３校目の学校でようやく特別支援学校へ赴任することができました。既に36歳になる年齢でした。これが私の特殊教育との出会いになります。

特別支援教育の魅力

特別支援教育の魅力は、前に述べたように、教科書に子どもたちを合わせて教えるのではなく、個々の子どもたちの実態に応じて、教える内容を工夫できる点です。現在、通常の学級においても、先生方がかなり研修され工夫を凝らした指導を行うことで、どの子どもでも理解できるように頑張って指導されてはいます。しかし､如何せん、子どもたちに対する先生の絶対数が足りません。例えば、2016年度の鹿児島市の小学校の教員の人数2,260人に対し、子どもたちの数は36,848人、一方、鹿児島県の特別支援学校の教員の数1,179人に対し、子どもの数2,088人です。このように、子どもたちの数に対する教員の数は、特別支援学校と通常の学級とでは比較になりません。この差が特別支援学校における個に応じた手厚くきめ細かい指導を可能にするのです。そして、この手厚いきめ細かい指導が子どもたちを成長させ、子どもたちの成就感や達成感の向上を図ります。もちろん、その結果は、指導する教員を成長させていくことになり、このような正のスパイラルが形成されていくのです。これが特別支援教育の大きな魅力と言えるでしょう。また、中学校では、どうしても、生徒を怒ったり、疑ったりすることがありましたが、特別支援学校へ勤務してから、全くそういうことがなくなりました。教員をおおらかにしてくれる学校なのです。まだまだ、魅力はたくさんあるので、詳しいことを聞きたい人は、松元の研究室にぜひ来てください。

演習論文報告会コメント

社会福祉学科
演習論文報告会

12月9日（金）3限
13：00～14：30

・1人あたりの発表時間：16分

214 教室　司会：増田　協力学生：末吉綾香、中島歩美、一森光貴、野中慎之介、山野恵理華

担当教員	報告者	題　目	PPT
小窪	下名浩介	大学生のバーンアウト研究 ー性格特性・携帯電話・アルバイトの側面からー	使う
小窪 （崎原）	有里樹里亜	スペシャルオリンピックスの活動に参加する知的障害者の変化について ー学生の活動記録の分析を中心にー	使う
佐々木	末吉加奈	若者のセックス離れについて ～メディアのいうことは真実なのか？～	使わない

225 教室　司会：村上　協力学生：前山誠、納奈々美、前田千晶、下舞佳弘、青山愛、坂元伽那

担当教員	報告者	題　目	PPT
大山	松永麻甫	知的障害児・者の家族支援に関する一考察	使う
岡田	濱田　薫	終末期医療に関して ～患者・家族にとっての穏やかな最期のために～	使わない
中山	伊佐愛莉	終末期や緩和ケアにおける専門職のかかわり	使わない
蓑毛	町田潤平	聴覚障害児の取り巻く教育の現状と課題に関する一考察	使わない

235 教室　司会：松元　協力学生：栗ケ窪淳平、中原ゆかり、田中芽紅、中村祥子

担当教員	報告者	題　目	PPT
栄留	海老原惇志	社会的養護のあり方・捉え方 ―子どもの村福岡の事例を通して―	使う
高橋	山口　翔	盲ろう者福祉について	使わない
研究助成	濵田　凌 （学部）	熊本地震被災地における子どもへのボランティア報告	使う
研究助成	坂上竜三 （大学院）	A地区　介護サービスおよび日常生活の課題についての研究 ～アンケート調査を用いて～	使う

演習報告会 214 教室　司会・コメント

増田　和高

214 教室では、以下の３名より研究の詳細について報告がなされた。

第一発表者は下名浩介氏であり、「大学生のバーンアウト研究：性格特性・携帯電話・アルバイトの側面から」というタイトルで発表が行われた。研究では、バーンアウト尺度や性格特性尺度などの指標を用いた量的調査に取り組まれており、調査分析を行った結果から「勤勉性が低いとバーンアウトのリスクが高くなる」「協調性が高いとバーンアウトのリスクが高くなる」ことが考察として報告されていた。フロアからの質問に対しても、自身の研究の限界等を踏まえつつ明確に応えられており、研究に対するコミットメントの高さがうかがえた。

第二発表者は有里樹里亜氏であり、「スペシャルオリンピックスの活動に参加する知的障害者の変化について：学生の活動記録の分析を中心に」というタイトルで発表が行われた。当該研究は、学生自身がスペシャルオリンピックスの活動に楽しく関わる中で「この活動の楽しさはどこからくるのか。」「この活動の意義はどのようなところにあるのか。」という身近な問題意識を研究という形に昇華させたものであった。研究手法についても、スペシャルオリンピックスの活動記録を洗い出し、カテゴリー化していくという丁寧な作業のものであり、「アスリートの成長を感じられることが活動に関わる際の喜びである」という結論についても納得のいくものであった。

最後に、末吉加奈氏より「若者の『セックス離れ』について：メディアのいうことは真実なのか？」というタイトルで発表が行われた。メディアが報道する「若者のセックス離れ」という現象について、「作られたイメージではないのか」という仮説のもと取り組まれた当該研究では、性行為に対する既存調査の結果や過去の「性」に関する新聞記事をもとに分析が深められていた。それらをもとに、「若者のセックス離れはメディアが若者の一部だけに焦点を当てている」とする結論は説得力があるものとなっていた。

上記３名の研究は、それぞれに研究領域や研究方法は異なるものの、身近な関心からリサーチクエッションを見出し、自らの手で結論を導こうとする意欲的な研究内容であった。関心や疑問をもったことに対して、自ら探究していくという「楽しさ」をフロア全体で共有することができた素晴らしい報告会であったものと考える。

演習報告会 225 教室　司会・コメント

村上　光朗

225 教室では、４名の学生の報告が行われた。

松永麻甫さん、濱田薫さん、伊佐愛莉さん、町田潤平さんの４名である。

以下、それぞれの演習論文の題目を示しておこう。

松永さんは、「知的障害児・者の家族支援に関する一考察」、濱田さんは、「終末期医療に関して―患者・家族にとっての穏やかな最期のために―」、伊佐さんは、「終末期や緩和ケアにおける専門職のかかわり」、町田さんは、「聴覚障害児の取り巻く教育の現状」であった。

４名ともに知識や概念の整理が手堅くなされたうえで主題に迫っていること。さらには、自分自身の専門職性との連関性において接近可能性(accessibility)の高い主題を選択している点において共通性がみられた。

「終末期医療・ケア」のテーマをともに選択された濱田さん、伊佐さんの両名は、自分のご家族のメンバーを看取った経験や病院でのソーシャルワーク実習の体験が、主題選択の大きな切っ掛けとなっている。「死」を主題に据えることは生半可な覚悟ではできない。またその一方で、「死」は病院という場では避けることのできないきわめて日常的な出来事でもある。困難なテーマを選ばれたお二人には素直に敬意を表したいと思う。

ただ、これは少々「ないものねだり」になるかもしれないが、「死」に関しての基本的な文献、たとえば、キューブラー・ロス、ノルベルト・エリアス、フィリップ・アリエスなどの文献に触れることも大切だと思える。こうした人々は、「死」に関する人々の心性や態度を根本的なところで考察した人々だからだ。ときに福祉の分野からはみ

だして、哲学、社会学、歴史学等々の分野に目を配ることも必要なのではないだろうか。

松永さんは、知的障害児・者をもつ家族への支援というこれも難しいテーマを、問題点を中心にして的確に整理しておられた。今後の課題についての指摘も見事であった。こちらにも少しだけ「ないものねだり」をするとすれば、既存のデータだけに頼らず、自分自身の足を使って家族の実態を調査し、ケーススタディを数多く重ねてゆくことであろう。

町田さんは、自身の聴覚障がい者としての体験をバネにして、聴覚障がい者教育の現状と問題点を指摘し、今後の課題を提示されている。健常者からは「見えにくい死角」を掬い上げて提示されており、貴重なレポートとなっている。聴覚障がいの教育現場に「手話が出来ない」教員が多数いることは、大きな問題提起であると感じた。各機関の連携を図ることの大切さが指摘されているが、町田さん自身が今後そうした連携を図る主体へと成長されることを祈念したい。

最後に、協力をしてくださった学生の皆さんに感謝の言葉を述べたいと思う。前山誠さん、納奈々美さん、前田千晶さん、下舞佳弘さん、青山愛さん、坂元伽那さん、時間計測・進行やベル押し、マイク・機器管理等々のお仕事、本当にご苦労様でした。多謝。

演習報告会 235 教室　司会・コメント

松元　泰英

報告者「海老原惇志」

題目　「社会的養護の捉え方に関する一考察～子どもの村福岡の事例を通して～」

栄留ゼミの海老原さんから、子どもの村福岡における自主研究の内容と厚生労働省雇用均等・児童家庭局家庭福祉課の「社会的養護の課題と将来像の現実に向けて」を基に「社会的養護」のあり方・捉え方の報告があった。最初、社会的養護の定義、子どもの村福岡についての説明があった。次に、考察として「村」という単位がもたらすメリット・デメリット、地域における社会的養護について、最後に子どもの立場に立った時の「村」である意味について述べられた。結論として、「子どもの村」は社会的養護を施設養護から家庭養護へとより推進させていることから、全国に「子どもの村」を普及させ、児童養護施設に代わる新たな社会的養護の基盤づくりとして必要である。課題として、資金や土地の確保と「受け入れ合意」の獲得、行政との連携、児童福祉の支援体制の変革や組織作りが挙げられた。

報告者「山口　翔」

題目　「盲ろう者福祉について」

高橋ゼミの山口さんから、１つの障害についての福祉や法的制度と比較し、２つの障害が重複している場合（この場合には盲ろう者）に対しては十分な支援ができていないのではないかとの報告があった。発表内容として、１盲ろう者の定義、２盲ろう者の実際－盲ろう者はどのようにコミュニケーションをとっているかー、３盲ろう福祉の歴史、４盲ろう者友の会インタビュー、５まとめへと結ばれていた。盲ろう者友の会インタビューでは盲ろう福祉の課題や社会の誤解などの内容が述べられた。最後に、まとめとして日本では盲ろうの定義がされていないことやテレビやメディアでもあまり取り上げないことなどが原因で、支援が進んでいないことや存在自体が知られていない事実があること。そのため、まず、社会が盲ろう者へ目を向けることが、盲ろう者の住みやすい社会づくりの第一歩であるとの発表内容であった。

2016年度社会福祉学会・自主研究助成による研究報告

熊本地震　被災地ボランティア
―子どもたちへのボランティア―

報告者　栄留ゼミ３年１組13番　濱　田　　凌

１．はじめに

私たち栄留ゼミは、「子ども家庭福祉」をテーマにしている。今回私たちは、平成28年４月14日から相次いで発生した地震により被災した熊本県に被災地ボランティアに行きたいという意見がゼミ内から挙がり、８月３日に熊本県合志市社会福祉協議会の学童保育事業の一つである「くすの木クラブ」(小学生約35名)で『遊び』のボランティアを行いました。

２．子どもを対象にした理由

子ども分野を扱うゼミということもあり、被災地ボランティアの話になった際に、被災後の子どもたちの心理的ダメージがまだ癒えていないのではないか、十分に遊べる環境にあるのか、ストレスを発散しきれていないのではないかなど被災地の子どもについての話が挙がり、私たちは子どもに対象を当てて考えることにしました。そして、自分たちにどのような方法でこれらを解消できるかを考え、遊びを通して子どもたちと直接触れ合うことで、①子どもたちのリフレッシュを行う、②普段とは違う集団の中で、遊びを通して協調性に触れるという二つをボランティアの目的としました。

３．熊本県合志市社会福祉協議会について

今回、被災地ボランティアでくすの木クラブに向かう前に合志市社会福祉協議会の方で、合志市の被災状況や社会福祉協議会での被災時の取り組みについてお話をしていただきました。先に合志市社会福祉協議会の概要について述べさせていただきます。合志市社会福祉協議会の管理施設には、保健福祉センター・老人憩いの家・福祉センター・福祉会館・福祉支援センター・障がい者福祉センター・保育園があります。行っている事業としましては、住民参加型支え合い事業　安心生活サポート(ぽっかぽかサポート)や乳幼児健康支援一時預かり事業(病児・病児後保育)、閉じこもり予防事業(さわやかデイサービス)など地域で暮らす多くの方々に焦点を当てた事業を行っています。

４．地震後の子どもたちの状況

合志市では、４月14日(木)に震度五強、４月16日(土)に震度六強を観測しました。この地震により、子どもを中心として精神的に不安定状態にあった人が42名確認したそうです。被災後もトイレにひとりで行けなくなった子、夜に家で寝るのが怖くて車中泊をしていた子などが被災後多くいたようです。

合志市社会福祉協議会は、平成28年７月15日まで避難所として利用されており、震災時には、電気や水が通っていたため多くの方が避難所として利用されていました。仕事に出ないといけない保護者から、子どもを預かってほしいという声が多く上がったので早い段階で預かりの事業を再開したと話していました。

５．くすの木クラブでのボランティア

くすの木クラブでは、約35名の小学生と「自己紹介ゲーム」・「魚釣りゲーム」・「ダンス」の三つを行いました。

Ⅰ．自己紹介ゲーム

被災後、建物が使えなくなった学童クラブからもくすの木クラブの方に小学生が来ていて、子どもたち自身もあまりかかわりの少ない状況だったことと学生が一人一人の名前を把握するため、また、お互い緊張した雰囲気があるのでアイスブレイキングを行うために行いました。６人くらいで前に立ち「Ａさんの隣のＢです」次の子が「ＡさんとＢくんの隣のＣです」のように自己紹介を行う

ゲームです。最後の子が名前を覚えられないときは、ほかの子やそれを見ている子が名前を教えていて、初めて話すことも自然的に話せていました。また、子どもたちが進んで助けている姿も見ることができ、協力する姿勢や優しさを私たちも感じることができました。

Ⅱ．魚釣りゲーム

魚釣りゲームは、風船に片栗粉を入れて縛ります。それに魚の絵を描いてお魚さんの完成です。子どもたちが自分で作ったお魚を割り箸で作った釣竿で釣るゲームです。その片栗粉を入れた風船は、むにむにした触感で癒しアイテムにもなります。作るとき子どもたちは、道具の取り合いもせず自分たちで順番を決めながら楽しく作っていました。家でも作りたいと話しており、たくさんの笑顔を見ることができました。

（松下美春）

Ⅲ．ダンス

ダンスは、ちびまる子ちゃんの「アララの呪文」の曲で行いました。振りが難しかったり、子ども自身がダンスに苦手意識を持っていたりして、なかなかはじめのうちは進みませんでした。しかし、踊っているうちに苦手だと話していた子たちも笑顔になり、一生懸命に振りを覚えようと踊っていていました。私たち自身もその様子を見て、嬉しくなりました。最後は全員で円になり踊り、とてもいいダンスに仕上げることができました。

（小丸万紀子）

６．遊びを通して・・・

今回このような遊びを行ったことで、子どもたちの多くの笑顔を見ることができました。くすの木クラブの職員からも「普段私たちがこのようなことを行ってもしてくれないけど、こうして学生さんと一緒ならみんな積極的に参加していた。」とおっしゃっており、子どもたちにとって、普段味わえない体験を私たちが提供することができたのではないかと思います。また、遊びの中で、子どもたちが順番を自分たちで決めてお魚をつくる様子やみんなで一つのことに向かって取り組む姿が見られ、目的にも挙げていた「協調性に触れる」こともできたと思います。

被災地ボランティアと聞いて、がれき撤去や物資提供などがイメージされると思いますが、今回私たちが行ったような人と人とのふれあいやつながりを行うことのできる被災地ボランティアがもっと多く行われるといいのかなと思いました。一緒に遊んで子どもたちとふれあい、話を聞き、一緒にニコニコ笑うことが今回のボランティアで体験でき、人とふれあうことで癒せるものがあると感じました。この報告を読んで、被災地ボランティアの可能性を考えるきっかけにしていただけると嬉しいです。

参考文献

・訪問した際にいただいた資料

・社会福祉法人合志市社会福祉協議会のホームページ

（www.koshi-shakyo.or.jp）

2016年度社会福祉学会・自主研究助成による研究報告

A地区 介護サービスおよび日常生活の課題についての研究
～アンケート調査を用いて～

鹿児島国際大学大学院福祉社会学部研究科　田中安平ゼミ
博士前期課程２年　149407
坂　上　竜　三

１．はじめに

介護保険制度が始まり15年がたち国は、住み慣れた地域の中で、医療・介護・予防・住まい・福祉サービスが一体として提供できるようなシステム構築(地域包括ケアシステム)を目指している。(地域包括ケア研究会：2013)

しかし、人口減少に転じ、医療施設がない地域や逆に過剰に医療施設がある地域のように都市と地方の医療・福祉サービスの供給主体の格差は広がっている。地域性を考慮し、地域独自の地域包括ケアシステムを作っていかなければならない。またそれを国は求めている。

今回は、地域包括ケアシステムが目指す住み慣れた地域(中学校区)より、地域住民にとって身近な規模である小学校区対象に、介護サービスの不都合な点や、日常生活上での不安や困りごと、特別養護老人ホームに期待する取組についてアンケート調査を行い、A地区の地域包括ケアシステムの方向性を考察することを目的とした。

２．研究の方法及び倫理的配慮

地区の選定について、平成22年の国勢調査時の鹿児島市の全体の高齢化率は21.2%であるが、A地区は47.6%である。これは、鹿児島市(100世帯未満の町・丁、および桜島地域を除く)の中でも、もっとも高齢化が進んでいる。また鹿児島市の中でも福祉施設が集中してある地域である。調査方法は、A 地区の全世帯(721世帯)にアンケート調査票を配布し、郵送にて回収した。集計・分析はSPSSstatistics24.0を使い行った。回収率は33.5%(252世帯)であった。

倫理的配慮として、調査は無記名で個人が特定できないよう統計処理されること、回答は自由意志で調査に協力いただける方のみ返送していただくよう調査票に記載した。また本調査は、鹿児島国際大学大学院教育研究倫理審査委員会の承認を得たうえで行った。

３．アンケート結果

３．１．調査対象者の属性

(1)　年齢・性別

回答者の内65歳以上は65.7%で、75歳～84歳代では男性よりも女性が多く回答されていた。

(2) 世帯状況・就労状況

世帯状況は、75歳以上の後期高齢者では約半数近くが「一人暮らし世帯」であった。

就労状況では、65歳以上は「無職」が約半数を占めたが、24.2%が何らかの就労をしており、「その他」と答えた方にも「農業」をしているという方もいた。

３．２．在宅福祉サービスについて

(1)在宅福祉サービスの利用状況

在宅福祉サービスの利用について、約80%が「利用していない」と答えていた。しかし、仕事をしている家庭の21.8%が在宅介護をしていることが分かった。 また在宅介護をしているうち要介護3以上は35.6%と重度者が在宅で生活をしていることが分かった。

(2)　在宅福祉サービスを利用している人の要望

よりよい生活が送れるようになるための在宅福祉サービスに対する要望では、「往診をしてほしい」が最も多く、「何気ない安否確認」や「気軽に相談できる場所の充実」と答えた方も多かった。

「生きがいを持てる活動の充実」は65歳以上の方が65歳未満より8%ほど多く答えられていた。

「介護をしながら仕事ができる環境整備」は65歳未満の方が65歳以上と比べ15.9%高くなっており、仕事と介護の両立を図る環境整備は重要な課題といえる。(図1)

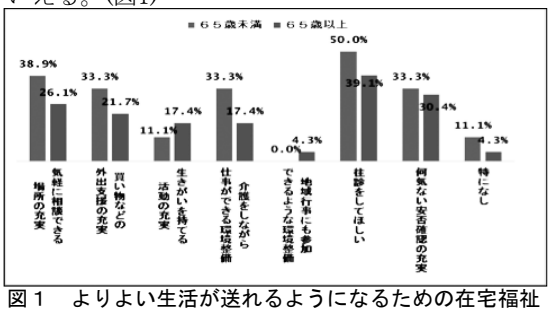

図１　よりよい生活が送れるようになるための在宅福祉サービスに対する要望

(3)在宅介護をしていない人の相談場所・要望

介護が必要となった場合の相談場所は、「地域包括支援センター」が40.3%で最も多く、２番目に「市町村役場」、３番目に「病院」の順に多かった。「特別養護老人ホーム」は4.7%と低かった。65歳以上では「民生委員」が3番目に多く、民生委員との地域住民とのつながりの強さも見られた。(図2)

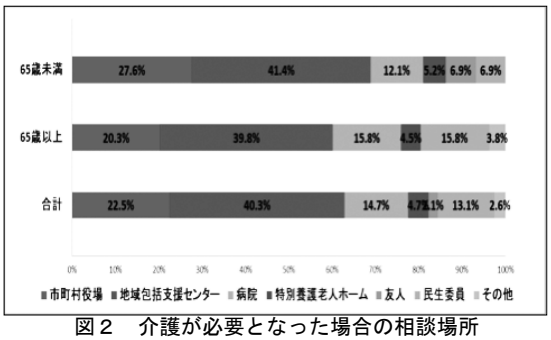

図２　介護が必要となった場合の相談場所

介護サービスを選ぶ時のポイントは、65歳未満・以上ともに「利用料が安い」が多く答えられていた。65歳未満と比べ65歳以上は「家から近いところがよい」が多く、「サービスの質がよい」は30%近く少ない結果となった。なお、「職員の対応がよい」は65歳未満の方が65歳以上に比べ17.6%ほど高いことが分かった。(図3)

３．３．特別養護老人ホームに期待すること

(1)　特別養護老人ホームの認知度

特別養護老人ホームの認知度について、約半数図が「知っている」であった。

(2)　特別養護老人ホームに期待する取り組み

特別養護老人ホームに期待する取り組みについては、「何でも相談できる窓口の設置」が一番多かった。また「低所得者支援」が2番目に多かった。さらに「病院退院後の高齢者の受け入れの強化」や「高齢者世帯等に対する安否確認の訪問活動」も多く回答が得られた。

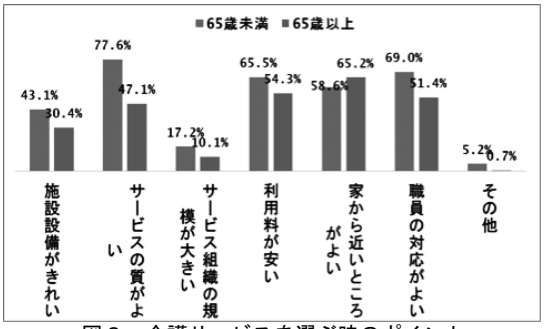

図３　介護サービスを選ぶ時のポイント

３．４．地域の課題について

地域の課題については、どの年代も「公共交通機関が不足している」、「日常の買い物が不便」、「ひとり暮らし高齢者や高齢者世帯が心配」が多く答えられていた。(表１)

表1　地域の課題

	65歳未満		前期高齢者(65~74歳)		後期高齢者(75歳以上)	
1	公共交通機関が不足している	75.6%	一人暮らしや高齢者世帯が心配	60.7%	日常の買い物が不便	50.0%
2	日常の買い物が不便	53.7%	公共交通機関が不足している	47.2%	公共交通機関が不足している	47.1%
3	一人暮らしや高齢者世帯が心配	47.6%	稼業の担い手がおおらず心配(子どもが少ない)	46.1%	一人暮らしや高齢者世帯が心配	44.1%
4	病院等の受診で交通手段の確保が困難	40.2%	日常の買い物が不便	42.7%	病院等の受診で交通手段の確保が困難	35.3%
5	交通にお金がかかる	35.4%	病院等の受診で交通手段の確保が困難	37.1%	家業の担い手がおらず心配(子どもが少ない)	26.5%

４．考察

Ａ地区の世帯状況では、やはり75歳以上になると一人暮らし世帯が急激に増えることが分かった。65歳～74歳代では「夫婦のみ世帯」が57.4%というところを見ると、今後10年間でさらに一人暮らし世帯が増加することが考えられる。

就労状況はＡ地区では24.2%が何らかの仕事をしている状況からも、在宅福祉サービスの利用状況が低いのも仕事をしていることが関係してくると思われる。(逆に仕事ができる程度の健康状態だから特段在宅介護サービスは受ける必要がない

ともいえる)。

仕事をしながらも家族が在宅福祉サービスを利用していると答えた方は21.8%となっている。また、「介護をしながら仕事ができる環境整備」は65歳未満の方が65歳以上と比べ15.9%高いという結果からも、在宅福祉サービス提供側のより柔軟な対応と、就労している職場の在宅介護に対する理解等も向上していかなければならない。そのためにも、在宅介護の現状などを当事者、職場、福祉サービス提供事業者、地域で何が必要かを話し合う必要があるように思われる。

特別養護老人ホームに対する地域住民の認知度は、65歳以上の方が認知度は高いと予測したが、65歳未満・65歳以上とそれほど大きな差は見られなかった。約半数は「知っている」と答えたが、「知らない」と答えた方も半数ということになる。施設名は知っていることもあると思うが、特別養護老人ホームとはどういう施設なのかを「利用しなくても、知っている」という方が増えるように情報提供など今後さらに必要と感じられた。また、特別養護老人ホームに期待する取組では、「何でも相談できる窓口の設置」がどの世帯も多くを占める結果が出た。しかし、介護が必要となった場合の相談場所として、特別養護老人ホームは4.7%という結果をみると、正反対となっている。このことは、住民からの大きなメッセージである。介護保険制度を利用するに当たり、まずは地域包括支援センターに相談するということが周知されるようになったが、住民が求めているのは、もっと身近な相談窓口が必要ということになる。さらに介護以外の相談も含むわけである。ワンストップサービス機能を施設の中でだれが担うかなど検討し、強化しなければならない。

地域の課題では、どの年代も「交通手段」と「ひとり暮らし高齢者世帯の心配」が課題であることが分かった。最近では高齢者の自動車運転の危険性がよくマスメディアに取り上げられているが、自動車がなければ生活が難しくなっている現状をもっと真摯に考えなければならない。交通手段の確保は鹿児島市内でもバスの便数が減ってきている地域は多くあり、共通の課題とも思われる。地域にある企業、関係者などすべてで話し合いながら交通手段を担保するような移動販売等の取り組みが期待される。また、Ａ地区の強みは、65歳未満の方も「一人暮らしや高齢者世帯が心配」と答えた方が３番目に多い点にある。つまり、それだけ若い世代が高齢者世帯を気にかけているということである。この強みを生かした地域間の見守り活動(たとえば、ゴミ出しの際近所の高齢者の方に声かける活動など)を強化できるようなシステムづくりが必要だと感じる。

５. 最後に

地域包括ケアシステムの実現のためにはそれぞれ身近な地域のニーズ把握がまず重要である。岩崎(2014：７)は、琉球孤島嶼地域の中高年者の生きがいについての研究において、地域ケアシステムに男性、女性の特有の生きがい感を取り入れたシステム構築が必要と述べており、さらには身体機能、認知機能の低下している人々を地域の中の生活者ととらえて、その方々の生きがいについても地域ケアシステムに反映しなければならないとしている。今回の調査でも、在宅福祉サービスに期待する取組として、65歳以上の高齢者は65歳未満と比べて「生きがいの持てる活動の充実」は8%と高く出ていた。このことを踏まえると、在宅福祉サービス(訪問介護・通所介護等)の中で生活上の生きがいを見出さなければならない。調査結果でも農業をすることを生きがいとしている高齢者にとってさらに介護を受けながらでも生きがい活動を継続できるようなサービスが求められるだろう。

最後に、調査の中から明らかにされた、Ａ地区の課題(特別養護老人ホームの認知度の低さ・交通手段等)や、Ａ地区の強み(若年層の高齢者への意識の高さ等)について、今後研究結果をＡ地区の中で共有し、Ａ地区特有の地域包括ケアシステムが構築できるように地域住民・関係機関とともに進めていきたい。

参考文献

・岩崎　房子(2014).「島嶼地域中高年者の生きがい感に関する要因」『鹿児島国際大学大学院学術論集』6 : 7

・地域包括ケア研究会(2013)『地域包括ケアシステムの５つの構成要素と「自助・互助・共助・公助」』
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/dl/link1-3.pdf
アクセス2015/10/15

2016年度鹿児島国際大学社会福祉学会シンポジウム

地方で知的障害者と「楽しく」生きる
～鹿児島国際大学SO同好会の活動と課題～

話題提供　福園　翔　NPO法人 てんとうむし（2016年３月卒業）
向井周一　社会福祉法人 南高愛隣会（2014年3月卒業）
山之内樹里亜　社会福祉学科4年
指定討論　津曲貞利　SO日本・鹿児島事務局長・鹿児島国際大学学長
コーディネーター　崎原秀樹　鹿児島国際大学 准教授

日　時　７月16日(土)　13時10分～16時(15時30分～交流会)
場　所　710教室
対　象　テーマや本学社会福祉学科に興味関心のある方
参加費　無料
後　援　公益財団法人　スペシャルオリンピックス日本
スペシャルオリンピックス日本・鹿児島

鹿児島国際大学社会福祉学会は、学生と教員で運営する学会で、学術研究を推進すると共に、会員相互の学問的交流を促進し、地域社会の文化的発展に寄与する目的で活動しています。この学会の大きな活動の一つに、講演会・シンポジウムの開催があります。

今年度は、「地元で知的障害者と楽しく生きる～鹿児島国際大学SO同好会の活動と課題～」のテーマで、シンポジウムを行いました。本シンポジウムでは、鹿児島国際大学SO同好会の活動を取り上げ、以下のテーマについての話題提供がありました。

① SO同好会とスペシャルオリンピックス～SON・鹿児島との関わりの中で～
② 元々あった流れに、より多くの人がのれるように～バドミントン・プログラムの変遷～
③ 何を見ながら練習してきたのか？
～１人のアスリートに対するSO同好会の活動記録分析～

最後に、指定討論として、SO日本・鹿児島事務局長である津曲鹿児島国際大学学長より、大学同好会によるSO活動の意義と課題についてお話をいただきました。

福園翔さんの話題提供

「SO同好会とスペシャルオリンピックス～SON・鹿児島との関わりの中で～」

2015年度の卒業生で、現在「ＮＰＯ法人　てんとうむし」に勤務している福薗さんからは、①スペシャルオリンピックスはどんな活動であるのか、②鹿児島ではどんな活動を行っているのか、③バドミントン・プログラムにおける練習内容の変遷、④大学でのサークル設立の経緯、⑤サークル活動の意義についての話題提供がありました。最初の「スペシャルオリンピックスはどんな活動であるのか」の内容では、スペシャルオリンピックスの使命、活動内容や参加者についての話題が中心でした。

ケネディ大統領の妹であるユニス＝ケネディ=シュライバーは長姉にあたるローズマリーに知的障害があったことで、「障害があるためにまだ一度もプールで泳いだり、トラックを走ったり、バスケットボールをしたことがない人たちに、スポーツを楽しんでもらいたい」という思いが募り、1962年に自宅の庭を開放してデイキャンプを行った。このことが、スペシャルオリンピックスの始

まりになったそうです。また、スペシャルオリンピックスと複数形で表されているのは、日常的なトレーニングから世界大会まで、様々な活動が年間を通じて、いつでも世界中のどこかでおこなわれていることを示しているということでした。また、現在、世界170の国と地域で、SOの活動が行われており、アスリートは440万人以上、130万人以上のボランティアが参加しているということに驚かされました。

向井周一さんの話題提供

「元々あった流れに、より多くの人がのれるように～バトミントン・プログラムの変遷～」

2013年度の卒業生で、現在長崎の「社会福祉法人　南高愛隣会」に勤務している向井さんからは、①SO同好会が変化した背景とアスリートの技術の向上、②部員増加とアスリートの技術の変化に伴うバドミントン・プログラムの変化について、③SO同好会とSON鹿児島との関連についての話がありました。この中で、部員増加とアスリートの技術向上の変化がバドミントン・プログラムを変化させ、そのことが一人ひとりのアスリートのニーズに合わせたプログラムを構築することになり、それに対してのSO同好会の部員同士の徹底した話し合いが、SO同好会を成長させ、所属する部員一人ひとりを一回り大きくさせていったことが述べられました。向井さんは、部員の増加とアスリートの技術の向上の変化が自然と正のスパイラルを起し、部員一人ひとりを成長させていったかのように述べていましたが、おそらくこのような流れに導くためには大変な苦労があったのだろうと容易に想像できました。

山之内樹里亜さんの話題提供

「何を見ながら練習してきたのか？～１人のアスリートに対するSO同好会の活動記録分析～」

現在、社会福祉学科４年生の山之内さんからは、大学同好会によるスペシャルオリンピックスの意義と課題の考察が述べられました。その内容は、一人のアスリートのバドミントン競技に関する約１年半の活動日誌とそのアスリートの変化を分析、検討したというものです。具体的には、約１年半のアスリートの活動日誌の記録を３つのカテゴリー（①対象者の技術に関する内容、②課題や次の目標に関する内容、③対象者の行動･様子）に分け、期間内のアスリートの変化について考察しています。このように活動記録を分析することで、アスリートの競技への取り組みや課題が見えてきて、一人ひとりの弱点の克服や強みを生かしたステップアッププログラム作成の際の参考になるはずであると述べていました。

津曲学長の指定討論

津曲学長の指定討論では、鹿児島におけるSOの活動が報告されました。この報告では、鹿児島の活動は都道府県レベルでは全国平均並みであるが、学生コーチが最も活躍している地区であるということが特筆すべきことであり、それを支えているのが鹿児島国際大学の学生で、貢献度がきわめて高いという報告でした。しかし、課題として、学生の時に一生懸命にSO活動を行っていた人たちが、就職すると仕事の都合で参加できなくなってしまうことやより多くの人々に広げることで、どうしてもアスリートへの支援が希薄なものになっていく可能性があるということなどがあげられました。　松元泰英　記

2016年度演習論文テーマ

（猪飼）ゼミ

氏　名	論文題目
岩正　和也	良好な人間関係を築くにはどうしたらよいか
平岡未沙英	働く女性と結婚

（岩崎）ゼミ

氏　名	論文題目
今村　圭佑	高齢者とのコミュニケーションを考える
児玉　幸太	事例・歴史から見る福祉レクレーションの役割
中村　友哉	人と付き合うために
藤園　直也	マインクラフトゲームについて
前山　悟	これからの時代に求められる福祉職像とバーンアウトについて
宮田　篤	日本における福祉税制と介護予防事業
米丸真由子	精神障害者が地域で生活して行くための支援
井上　拓海	スマホゲームの発展について
山下　宗明	近代社会におけるタバコの問題 ～これからの時代、タバコとどのようにかかわるか～
吉元　将太	バリアフリー ～住み慣れた地域で生活するうえでの問題点と課題～
末吉　綾香	アニマルセラピーについて ～認知症ケアへの効果～
山脇　美穂	自己評価を改善するには

南　あやか	ジブリアニメ登場人物における福祉的視点からみた支援の一考察
小牟禮輝行	交通事故を通して考える車の危険性について
俵積田桃香	障害者虐待の現状と課題について
中島　歩美	ターミナルケア ～介護福祉施設におけるターミナルケアを中心に～

（栄留）ゼミ

氏　名	論文題目
粟ヶ窪淳平	児童虐待が起こりうる様々な要因と今後の課題に関する研究
吉田　正伸	発達障害の種類と家族の支援
竹迫　菜穂	AC にとっての回復とは何か考える
鳥越　智尋	発達障害児の早期発見の現状と課題について
海老原惇志	社会的養護のあり方・捉え方 ―子どもの村福岡の事例を通して―
山野　瑞菜	若者の早期離職問題の対策・支援について
出水健太郎	同性パートナーシップ制度について
板敷宥愛之	AC と依存との関わり
押川　龍広	児童養護施設における社会参加するための支援について

（大山）ゼミ

氏　名	論文題目
篠原　光騎	障害者の就労支援－自立支援に向けた取り組み－
松永　麻甫	知的障害児・者の家族支援に関する一考察
前山　　誠	社会福祉法人の現状と課題 - 介護保険制度下における社会福祉法人の在り方 -

谷上　裕昌	マイナンバー法の導入によってもたらされるモノ
池田　将大	待機児童に関する一考察
徳田　翔太	日本における子育て支援施策－その現状と課題－
吉元　優馬	自動車の誕生と福祉車両

（岡田）ゼミ

氏　　名	論文題目
古藤　倫子	スクールソーシャルワーク ～児童生徒を支えるネットワークについて～
祝迫　里奈	アダルトチルドレンの受容から回復までの道のり
隈元　志歩	難病当事者の生活 ～病気が当事者の生活をどう変えるのか～
山下　芳季	知的障害者と共に生きる
納　奈々美	難病が患者とその家族 ～難病が患者家族に及ぼす影響～
諏訪　文哉	うつ病患者の復職支援について
牟禮　直也	自助組織の力 ～依存症の回復における自助組織の役割～
清藤　恵子	自傷行為について ～生きたいという涙と叫び～
新本　里穂	バーチャルリアリティに嗜癖していく子ども達
濱田　　薫	終末期医療に関して ～患者・家族にとっての穏やかな最期のために～
山元　麻央	貧困の現状 ～女性の厳しい生活実態～

小窪（旧崎原）ゼミ

氏　　名	論文題目
赤木　稔幸	社会福祉における介護と看護の役割について

有里樹里亜	スペシャルオリンピックスの活動に参加する知的障害者の変化についての一考察 －学生の活動記録の分析を中心に－
井手上鈴果	アドラー心理学から見た自分史 －私の自分史とアドラー心理学の思考を結び付けてみて－
田畑　翔次	パチンコから見るギャンブル依存について
春花　慶彦	普通って何？ －ノーマライゼーションの視点から－
前田　結華	「私」に関する一考察 －周囲の人は「私」をどのように受け止めてきたのか－
峯嵜　由紀	イラストの趣味を通じての自己についての考察 要旨が未提出

（小窪）ゼミ

氏　　名	論文題目
一森　光貴	生活保護法について ―生活保護法の歴史、生活保護の種類、不服申立てについて―
下名　浩介	大学生のバーンアウト研究 －性格特性・携帯電話依存・アルバイトの側面から－

（佐々木）ゼミ

氏　　名	論文題目
大宮路弘樹	不眠症と過眠症―居眠りに隠された真実と社会理解の格差
末吉　加奈	若者のセックス離れについて ―メディアのいうことは真実か
立元　美子	剣道をめぐるライフヒストリー
豊留　博紀	医療観察法の意義と支援の実態
山野恵理華	緊縛美 ―S と M…身体と心のまじりあい

（佐野）ゼミ

氏　　名	論文題目
宮下　知也	家庭環境が子供に及ぼす影響と家庭の在り方
山之口　廉	日本の認知症に対する取り組み
森永　了功	認知症と行動心理の関係性と自分の見解
檢見崎大樹	人の記憶について

（高橋）ゼミ

氏　　名	論文題目
中原ゆかり	日本のホームレス支援について
小田　真人	青年団の現況とこれから
鮫嶋明香音	ゲームセンターに高齢者はなにを求めてやってくるのか
田中　芽紅	宮崎県における時だつ予防対策の在り方
中村　祥子	事例から見る認知症ケア
山口　　翔	盲ろう者福祉について

（田中顕）ゼミ

氏　　名	論文題目
下舞　佳弘	自衛隊とアメリカ軍における自殺予防対策の現状に関する一考察
立石　瑛大	自衛隊の災害派遣における派遣隊員の家族支援に関する一考察

（中山）ゼミ

氏　　名	論文題目
東條文弥美	インターライ方式ケアアセスメントによる事例研究及び発達障害に関する研究
井手　佑輔	インターライ方式ケアアセスメントによる事例研究と高齢者施設の在り方に関する研究
甲斐　　陽	高齢者における家庭内事故に関しての研究
青山　　愛	インターライ方式ケアアセスメントによる事例研究および認知症に関する研究
伊佐　愛莉	終末期や緩和ケアにおける専門職のかかわり

（蓑毛）ゼミ

氏　　名	論文題目
吉田　　祥	スペシャル・オリンピックスの現状と課題に関する一考察
中尾沙由子	児童虐待の現状と課題に関する一考察
前田　裕樹	日本赤十字社における国際貢献の現状と課題に関する一考察
松下　隼也	日本史教育における全国と地域の所産の関係付けに関する一考察
阿久根佑季	在宅介護の現状と課題についての一考察
坂口　　健	障害を持つプロ野球選手の特性に関する一考察
徳永麻須香	障害者の就労支援の現状と課題に関する一考察
西迫美智代	子育てを支える療育支援についての一考察
森　　隆英	我が国における高齢化と「無届け介護ハウス」の増加に関する一考察
大瀬　優輝	健聴者から聴覚障害者（中途失聴）になったことによる現状と課題に関する一考察
東　　千暁	全国的な子育てサロンの現状と課題に関する一考察

前田　千晶	知的障害児の取り巻く教育・福祉の現状と課題に関する一考察
町田　潤平	聴覚障害児の取り巻く教育の現状と課題に関する一考察
森木　優太	聴覚障害者としての生育歴と社会への要望に関する一考察

（村上）ゼミ

氏　　名	論文題目
向吉　雅宏	ゾンビについての考察 ―ゾンビは何故噛むのか―
坂元　伽那	きのこの考現学

社会福祉学会自主研究助成の募集

１．助成の目的

鹿児島国際大学社会福祉学会・学生会員の自主的な学習・研究活動の活性化を図る。

２．助成の対象

自主研究(ゼミを含む)や特色あるボランティア活動・実習活動報告等とする。

３．助成額

１件あたり５万円を上限として、総額30万円までとする。

４．申請受付期間（以下 2016年度のものを例として提示）

2016年4月15日(金)－5月13日(金)

５．申請手続方法

個人申請の場合……本人名で申請する。　　共同申請の場合……研究代表者名で申請する。
申請書に必要事項を記入のうえ、栄留研究室(５号館４階)または３階談話室の栄留のメールボックスに提出。予算内容についても必ず記入すること。
また、助成の対象は、研究活動に必要な文献の複写、資料の印刷、文具等の各種消耗品ならびに書籍の購入および交通費等とする。（換金性の高い図書券等は不可）
交通費の支出は公共交通機関（１人あたり運賃と利用した人数を書いた明細でよい）に限り、ガソリン代は不可とする。

※申請者は、別紙申請書を提出後、eidome@soc.iuk.ac.jp まで、次の要領でメールの送信をお願いします。

①件名・表題＝「2016年度自主研究助成申請の件で」、②本文＝申請者の学籍番号・氏名および連絡先の電話番号を記入して下さい。なお、申請書類の記載内容の変更（例　連絡用のメールアドレスの変更等）が生じた場合は、必ず、栄留まで連絡をお願いします。

６．採否の決定

申請順に申請内容を審査し、採否について随時、申請者に通知する。通知時期は５月末を予定している。

７．活動成果発表

研究報告書と、年度末に発行する学会誌『ゆうかり』に掲載するための要旨を学会運営委員会に提出する。
(研究活動成果の報告については、2016年1月9日(土)ポスターセッションを開催予定。
ただし、報告本数によっては日程および発表方法も変更の可能性あり。)

【研究報告書】　様式：Ａ４用紙にて作成。枚数・字数等、特に制限は設けないが、研究内容に関して可能な限り詳細な報告を記載すること。
【要　　旨】　様式：Ａ４用紙にて作成。研究報告書の要旨を3,000字～3,500字以内で作成。
※本助成は「博士論文・修士論文・演習論文」そのものへの助成ではありません。各論文の要旨等をそのまま提出することのないようにお願いいたします。小見出しを適宜入れるなどの様式の詳細は、『ゆうかり』の自主研究助成の原稿を参考にしてください。

８．助成金の執行

採用通知を受けてから、立て替え払いをして領収書を保管しておき、所定の自主研究助成使途明細書を作成し、さらに指導教員の承認を得た上で、研究報告書および要旨とともに提出すること。

鹿児島国際大学社会福祉学会会則

[総　則]

第１条　本会は，鹿児島国際大学社会福祉学会と称し，本会の事務所を鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科に置く。

第２条　本会は，学術研究を推進し，会員相互の学問的交流を促進するとともに，地域社会の文化的発展に寄与することを目的とする。

第３条　本会は，前条の目的を達成するために次の事業を行う。
（ア）会報ならびに機関紙の編集・発行
（イ）研究会・講演会等の開催
（ウ）その他，本会の目的を達成するために必要と認められる事業

[組　織]

第４条　１．本会は，福祉社会学部社会福祉学科並びに大学院福祉社会学研究科に在籍する学生および両科の専任教員をもって会員とする。
２．準会員については，別に定める。

第５条　１．本会に次の機関を置く。
（１）会長
（２）総会
（３）運営委員会
（４）監査委員
２．会長は，社会福祉学科長とする。
３．運営委員(教員４名，学生８名以上)および監査委員(教員２名，学生２名)は，社会福祉学科で選出し，総会の承認を得るものとする。
４．前項の各位委員の任期は，教員については２年，学生委員については１年とする。
ただし，再任は妨げないものとする。

[機　関]

第６条　１．会長は，本会を代表する。
２．会長は，年１回の定期総会を招集しなければならない。
３．会長は，運営委員会の議決に基づいて臨時総会を招集することができる。

第７条　総会は，本会の最高議決機関である。

第８条　１．運営委員会は，総会の承認により，学会の運営にあたる。
２．運営委員会は，委員長(教員)と副委員長(学生)の各１名を互選する。
（１）運営委員長は，運営委員会を代表し，定期およびに臨時に運営委員会を招集する。
（２）運営委員会は，そのもとに必要に応じて委員会を置くことができる。
３．運営委員会は，教員委員および学生委員のそれぞれ過半数の出席をによって成立する。

４．運営委員会は，次の事項を審議決定しなければならない。
（１）年間事業計画
（２）予算案および決算書
（３）会則の改正ならびに諸規定承認・改廃
（４）その他必要な事項
５．運営委員会の議決は，出席した教員委員および学生委員のそれぞれの過半数の賛成で決する

[財　政]

第９条　教員会員の会費は，年額2,500円とし，年度初めに納入する。学生会員の会費は，年額2,500円とし，入学時に一括納入する。

第10条　１．本会の経費は，会費・補助金・寄付金でまかなう。
２．会計年度は，４月１日から翌年３月31日までとする。

第11条　会費の徴収，保管および支払いについては，大学事務局に委任するものとする。

第12条　運営委員会は，毎年会計年度終了後２ヶ月以内に決算を行い，監査委員の監査を受けたうえで総会に報告し，その承認を得なければならない。

[改廃手続]

第13条　本会則の改廃は，運営委員が発議し，総会の決議を経なければならない。

附則

１．この会則は，昭和57年４月１日から施行する。
２．この会則は，平成13年７月27日に改正し，施行する。
３．この会則は，平成15年７月４日に改正し，施行する。
４．この会則は，平成18年４月１日に改正し，施行する。
５．この会則は，平成20年４月１日に改正し，施行する。

2015(平成27)年度　鹿児島国際大学 社会福祉学会　収支決算報告

収入の部

項　　目		決　算	予　算
前年度繰越金		4,913,906	4,913,906
会費	913,750	965,082	895,000
参加費	16,000		
雑収入	35,332		
収　入　計	965,082	5,878,988	5,808,906

支出の部

項　　目		決　算	予　算
『演習論文要旨集』発行費	291,600	2,544,739	310,000
会議費	18,352		17,000
自主研究助成費	241,970		300,000
新入生歓迎行事費	260,000		240,000
卒業ﾊﾟｰﾃｨｰ開催費	300,000		240,000
『ゆうかり』発行費	349,450		470,000
講演会・ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ開催費	173,172		250,000
コピー費	0		10,000
事務費	349		10,000
交通費	0		10,000
通信費	3,780		10,000
特別事業費	814,454		830,000
学生アルバイト料	69,112		0
会費	22,500		50,000
支　出　計	2,544,739		2,747,000
当年度末残高		3,334,249	…①
収　入	平成 28 年度会費 751,250	751,250	…②
通帳残高（①＋②）		4,085,499	H28.3.31 現在

編集後記

４年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。
学会誌の内容は、研究助成報告やシンポジウム報告など多彩です。しかし、目次をみていただければすぐわかるように、この号は崎原先生の追悼号です。学会に新しい風を吹き込み、多くの試みを打ち出してこられた崎原先生への追悼の思いが、この学会誌には込められています。学会を長きにわたり育んでこられた先生への思いを共有できたらと願ってやみません。

2016(平成28)年度　鹿児島国際大学社会福祉学会　運営委員

運営委員　高橋 信行　　栄留 里美　　松元 泰英　　佐々木 陽子
１年：細山田梨奈　松尾愛理紗　牧大貴　東原理紗　竹下綾乃　大重由夏　漆間将生　興梠瑞月
３年：山口凌　肝付友香　福留昂大　平内晴菜　濱崎寛之　前田譲　大村琢也　柳佑太郎　松下美香
　　小薗眞喜　津嘉山まどか　東哲平　下村真子　佐々木胡子　東福康平　郡山大志　安本瑛来
会計監査委員　田中安平　　鰐淵祐一　　**（学生）** 濵田凌　　安庭あゆみ

学会誌の作成に関わらせていただき、良い経験になりました。手に取った方にとって、少しでも読み応えのあるものでありますように。

（興梠瑞月）

４年生の皆様ご卒業おめでとうございます。今回、演習論文集の編集という貴重な体験をさせていただきとても光栄に思っております。私も残り一年で卒業となりますが、悔いの残らないように過ごしたいと思います。皆様のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

（濱崎寛之）

４年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして、崎原先生。崎原先生のご逝去を悼み、謹んでご冥福をお祈りいたします。

（川﨑愛子）

崎原先生が情熱をもって学会誌の制作に取り組まれていたのは存じ上げていました。微力ながら、学生３名教員１名で、追悼号を出すことを目標に取り組んできました。発行にこぎつけることができたのも、多くの皆様のご協力によるものと感謝申し上げます。先生方、元ゼミ生をはじめとする学生の皆さんから多くの追悼文が寄せられました。どこまでも高いこの天空のどこかに、その思いが届くことを信じます。

（佐々木陽子）

鹿児島国際大学社会福祉学会誌

ゆうかり　第16号

発行　2017年３月17日
編集　鹿児島国際大学社会福祉学会
住所　鹿児島市坂之上８-34-１
　　〒891-0197　☎099（261）3211（代）
印刷・製本　有限会社　広和印刷
☎（099）222-3522　Fax（099）239-0379

ゆ う か り　第16号　　2017年 3 月17日鹿児島国際大学社会福祉学会編集